

# 琉球新報

2008年(平成20年)

9月17日水曜日

THE RYUKYU SHIMPO

第35814号

## 穂ち落

※「落穂」とは、琉球新報紙の文化面のコラムで、今回は6回目の掲載分です。10名の執筆陣の中に施設長の三浦も含まれ半年間、計13回ほどの掲載が予定されています。紙面でご覧頂けない方にも読んで頂きたくニューズレターにて転載していききたいと思いますので、どうぞお付き合い下さい。

薬物依存症という病気は医療の立場から見ればもちろん病気の問題なのでは、これが司法の立場から見れば犯罪であり、教育の立場から見れば非行の問題、(近所さまから見ればこの厄介者、立場ごと)に独自に呼び名をつけられ、つい数年前までそれぞれが独自に対応していたのです。今の沖縄では県立総合精神保健福祉センターなどの皆さまのご苦勞を中心に、(さ

考えたら、いや考えなくても私は医者でもなければ警察官でもない。じゃあ助けられないのかというところという訳にもいかない。(人)として助けよう」と、(こ)まで書いて何が

### 立場を超えて

三浦 陽一

(沖縄ダルク・チーフディレクター)

すがに(近所の皆さま)も集まれないところもあります。が、一つのテーブルにつき機会が継続してもたれています。「路を歩いている人、人が倒れていた。苦しんでいる。助けようと思ったけれど、よく

言いたいのかと言くと、人を助けるのは資格とか立場ではなく、(人)であると言ったことなのです。私は仕事を忙しすぎてあんな仕事になってしまふことがあります。極力、そ

のような事は避けようとしても慣れと麻痺(それに疲労)が拍車をかけ、どうすれば早く簡単に解決できるのかを求めてしまふ事があるのです。しかし、これはある場面ではダルクの新しい仲間が一番大切にされる仲間であって、その仲間達にとってクリーン(断薬期間)の長くなった私は同じ薬物依存症者には見えません。そんな私が余計な提案をするよりも、仲間の中で起る笑いや、その場にある雰囲気(ぬくもり)が、使いたい、逃げたいという気持ちを押しとどめさせるのです。薬物依存症がよくなっても私のおかけではないし、悪くなっても私のせいではないのです。私達にできるのはたった少しのお手伝いだけで、自分の回復は自分で責任を持ってください。ダルクにいると一日一回は大笑いができます。